広島大学大学院教育学研究科紀要　第一部　第61号　2012　161－167

発達障害生徒のためのソーシャルスキルトレーニング用ビデオ教材の作成

若松　昭彦・坂口　明正[1]

（2012年10月２日受理）

Creating of the Video Teaching Materials for Social Skills Training of Students with Developmental Disorders

Akihiko Wakamatsu and Akimasa Sakaguchi[1]

Abstract: In this research, we carried out the questionnaire to the teachers of resource rooms of 57 junior high schools. Based on the result of it, we chose social skills considered to be necessary for students with developmental disorders, such as high functioning autism, LD, and ADHD, and created the video teaching materials for social skills training (SST) of them. They consist of a total of 26 skills, such as self-control, on-task behaviors, and assertion. About each skill, we made both the scene where a certain student does not perform suitable behavior, and the scene where the same student performed suitable behavior. Moreover, we made the guidebook which can be used as reference of SST.

The teacher who actually used these teaching materials reported as follows;

1. They are useful for students to consider more suitable behavior and social skills.
2. By reference of the guidebook, teacher would be able to change the contents and the method of SST easily according to each student's condition.
3. Since they are easy to operate, the students and teachers of regular classes may also be able to use them.

On the other hand, it is required to examine how to choose actually important skills, or to prove training effect, etc. In future study, we should improve these teaching materials, taking close cooperation with school teachers.

Key words: developmental disorders, students, social skills training, video teaching materials
キーワード：発達障害，生徒，ソーシャルスキルトレーニング，ビデオ教材

１．研究の目的

発達障害の子どもは，話の雰囲気や暗黙のルールなどが読み取れなかったり，行動がコントロールできずに友達に一方的に関わったり，自分の気持を表現できなかったりといった社会性や対人関係の問題を持ちやすいことが知られている。適切な援助がないまま，長く不適応状況にさらされることによって，不登校，引きこもりなどの二次障害を引き起こす可能性がある。また，いじめやからかいが原因で，社会的な場面での被害的な考えや言動が目立つこともある。こうした二次障害を防ぐためにも，社会性の指導が必要である。

発達障害の子どもの社会性の課題に対する指導法として，比較的能力の高い自閉症や知的障害，高機能広汎性発達障害やLD，ADHDなどの発達障害のある子どもや成人に対して，人付き合いやコミュニケーションの基本ルールを段階的に教えていく，ソーシャルスキルトレーニング（Social Skills Training，以下

[1]福岡市立福岡中央特別支援学校

SST）の試みが近年増えてきている（岡田・後藤・上野, 2005；是枝・小谷, 2006）。環境調整や学習支援，薬物療法などと SST を併用することで効果があることも示されており，国内でも，SST は，特別支援教育の教室や医療機関，相談機関で盛んに行われるようになっている。

ところで，SST の課題の１つとして，指導効果の般化と維持の困難さが指摘されているが（相川, 2010），この般化・維持が期待できる指導方法の１つとして，ビデオモデリングが挙げられる。SST で最もよく用いられるのは，教示，モデリング，モニタリング，ロールプレイ，フィードバック，ホームワークのいずれかを組み合わせたものであるが（岡田・後藤・上野, 2005），これらの中のモデリングの一種であるビデオモデリングは，その場にいる指導者などが目標スキルを使用した場面のモデルを提示するのではなく，ビデオ映像を用いてモデルを提示するものである。ビデオモデリングには，獲得行動の般化と維持に効果があることの他に，①文字情報よりも注意を向けやすい，②様々な行動を現実に近い状況で提示できる，③時間系列を理解しやすい，④語調・表情・身振りなどを表現できる，⑤指導者の技量の差によらず，安定した刺激を提示できる，⑥反復練習が容易である，⑦多くの指導者を必要としない等の利点もある（Charlop & Milstein, 1989；藤金，1999；Nikopoulos & Keenan, 2004；Charlop-Christy, Le, and Freeman, 2000；南, 2006；Delano, 2007；Bellini & Akullian, 2007；益山・青山，2011）。そこで，本研究では，このビデオモデリングで用いるためのビデオ教材を作成する。

しかしながら，ビデオ教材だけを作ったとしても，それをどのようにソーシャルスキルの指導に用いるかは指導者に任せられ，指導の効果が得られるかどうかは，指導者の知識や経験によって変化する可能性がある。そのため，SST の教材を作成するにあたっては，ビデオ教材の内容だけでなく，指導の方法も併せて検討することが必要であろう。

なお，本研究では，中学生を対象とすることとした。中学校の時期は，対人関係の不調に起因する不登校やいじめなどの問題が急増する時期である（相川・佐藤, 2006）。この段階に対人関係を良好にする SST を行うことは，これらの問題の予防につながる可能性もある。また，ソーシャルスキルの8割ほどは小学校の段階で身に付けると言われており（小林, 2005），生涯にわたって円滑な対人関係を営むためには，この時期にソーシャルスキルの基礎をしっかりと学んでおく必要がある。その一方で，中学校では異性に関することや先輩後輩関係に関することなど，青年期以降必要となってくるような高度なスキルの学習も求められる。このように，中学校時代に学ぶ必要があるソーシャルスキルは多数あると考えられるが，指導の優先順位が高いスキルを選択することで，実用性・汎用性の高いビデオ教材が作成できると考えた。

そこで，本研究では，教員へのアンケート調査を行って，必要性が高いと考えられるスキルを選択し，先行研究などから指導方法について調べ，それらに基づいたビデオ教材を作成することを目的とする。

Ⅱ．方　法

１．アンケート調査

（１）対象：中四国九州の中学校通級指導教室（自閉症・LD・ADHD 等）の担当教員をアンケート調査の対象とした。調査にあたっては，学校長や各県・市の教育委員会に予め連絡して調査の趣旨を説明し，アンケート送付の承諾を得た後にアンケート用紙を郵送した。計73校にアンケートを郵送し，うち57校から返送があり，回収率は78.1%，有効回答率は74.0% であった。

（２）期間：2011年８月に各学校に依頼・郵送し，同年９月にアンケートの回収を行った。

（３）調査内容：先行研究で挙げられている多くのソーシャルスキルに対応しており，標準化されているソーシャルスキル尺度（上野・岡田, 2006）を参考にして，ソーシャルスキルの項目を作成した（Table 1）。各項目について，①担当教員が今までの経験から考える発達障害のある生徒における該当ソーシャルスキルの必要度，②最大３名の通級指導教室に現在通っている生徒を想定し，各生徒における該当ソーシャルスキルの必要度を，「必要ない」，「少し必要」，「必要」，「とても必要」の４件法で尋ねた。想定した生徒については，学年および障害名を選択する項目を設けた。また，シナリオ作成の参考とするため，各ソーシャルスキルにおける付加的情報を記述する備考欄，具体的な場面や関連する他のスキルなどを記述する自由記述欄を設けた。

（４）スキルの選択：各スキルの評定結果について，「必要ない」を０，「少し必要」を１，「必要」を２，「とても必要」を３と得点化し，①教員の今までの経験に基づく必要度，②想定した全生徒における必要度，③総必要度（①と②の合計），④自閉症の生徒に対する必要度，⑤ LD の生徒に対する必要度，⑥ ADHD の生徒に対する必要度をそれぞれ算出した。全てのソーシャルスキルについてビデオ教材を作成し，それぞれの指導方法を検討することは困難であ

Table 1　ソーシャルスキルの項目

項目	内容	領域
1	丁寧すぎず，状況に合わせた言葉づかいをすること	マナー
2	乱暴すぎず，状況に合わせた言葉づかいをすること	
3	自分が悪いときに自ら進んで謝罪すること	
4	相手の話に関心を示しながら聞くこと	
5	適度な距離で人と接すること	
6	時間を守ること	
7	積極的すぎず，異性と適切に関わること	
8	消極的すぎず，異性と適切に関わること	
9	相手のしぐさや表情から気持ちを読み取ること	状況理解
10	冗談や皮肉など裏の意味のある言葉を理解すること	
11	意識しすぎず，身だしなみに適度に気を配ること	
12	無頓着すぎず，身だしなみに適度に気を配ること	
13	意識しすぎず，人の目を適度に意識して振る舞うこと	
14	無頓着すぎず，人の目を適度に意識して振る舞うこと	
15	場の雰囲気を感じること	
16	授業や課題に集中して取り組むこと	セルフコントロール
17	行動する前に，じっくり考えること	
18	自分のした行動を振り返ること	
19	悲しい・怒った気持ちをうまく切り替えること	
20	楽しい・嬉しい気持ちをうまく切り替えること	
21	与えられた仕事を最後までやりきること	課題遂行
22	失敗や予定外のことが起こっても，柔軟に対応すること	
23	仕事や課題に取り組む際，計画を立て，それに沿って実行すること	
24	共同の作業で，与えられた役割をきっちりとこなすこと	
25	仲間と協力しながら仕事を行うこと	
26	適度に視線を合わせて人と話すことができること	仲間関係の開始
27	臆することなく仲間に話しかけること	
28	仲間を遊びに誘うこと	
29	仲間と冗談を言い合うこと	仲間関係の維持
30	仲間と会話を続けること	
31	友達との約束を守ること	
32	外出や遊びなど，仲間と計画を立てて実行すること	
33	仲間と趣味や興味のあることを共有すること	
34	仲間と秘密を共有すること	
35	仲間が失敗したときなど励ましたり慰めたりすること	仲間への援助
36	困っている仲間を助けること	
37	仲間の悩みや不安を共感しながら聴くこと	
38	相手の話をさえぎることなく聞くこと	聞く・話す
39	適切に発表やスピーチをすること（姿勢や話し方など）	
40	タイミングよく，うなずき・あいづちを入れること	
41	身振りや手振りをうまく使って表現すること	
42	知っている人に自分から挨拶をすること	アサーション
43	集団に向かって自分の考えを述べること	
44	人に感謝の意を伝えること	
45	いやなことはしっかりことわること	
46	くやしさや怒りを言葉で伝えること	
47	わからないことは質問すること	
48	親しい人に不安や心配なことを話すこと	
49	何でも助けを求めず，困ったときに助けを求めること	
50	困ったときは，しっかり人に助けを求めること	
51	話し合いの内容に沿った発言をすること	話し合い
52	決まった意見に同意すること	
53	話し合いの際，多数決，妥協案などの方法を提案すること	

＊背景がグレーのものは，最終的に選択された 26 項目を示す。

ると予想されたため，必要度の高いものからソーシャルスキルを選択した。その際，過去のビデオ教材作成の経験（若松・坂口，2012）や，総必要度の平均347より必要度が高いものが26項目あることを参考に，25項目程度のソーシャルスキルを選択することを目安とした。

そこで，総必要度の上位25位を選択したところ，ADHD の必要度15位である「相手の話をさえぎることなく聞くこと」を含むことができなかった。そのため，教員の経験に基づく必要度上位20位に加えて，想定した全生徒における必要度上位20位を選択した。いくつかのスキルについて重複しているものが見られ，合計26のソーシャルスキルとなった。この26のスキルは，自閉症，LD，ADHD の各必要度15位までを含んでおり，３つの発達障害にわたって必要度の高いスキルを選択することができたと考えられる。

選択されたスキルの内訳を見ると，セルフコントロール，課題遂行，アサーションなどが多くなっていた（Table 1）。このことから，教員は，日頃の学校生活で，自分の意見を主張させたり，課題を遂行させたりすることを重要な課題として捉えていることがわかる。また，これらのソーシャルスキルは，教員が生徒の進学や就労に際して必要だろうと考えているスキルである可能性もある。一方，「自分の身の周りのソーシャルスキルに手一杯で，友だちに関するスキルには手が回らない」という意見も挙げられていたように，仲間関係やマナーのスキルに関しては，概して必要度が低い結果が得られた。

２．ビデオの作成

選択された各々のソーシャルスキルに関して，実際の中学生に起こり得るシナリオを，井澤・霜田・小島・細川・橋本（2008），ことばと発達の学習室 M（2009），アンケート調査の備考欄や自由記述欄，特別支援教育に携わる教員の意見などを参考に作成した。シナリオは，生徒が客観的に適切な行動や周囲の状況を考えることができるように，他者視点から見るものとし，行動や言葉づかいも現在の中学生を想定して作成した。実際にビデオ教材を用いてソーシャルスキルの指導を行ったことがある教員，益山・青山（2011），井澤ら（2008）を参考に，各ソーシャルスキルについて，適切にスキルを使用できている場面とそうでない場面の２場面を作成した。

作成したシナリオをもとに，2011年12月に A 大学演劇サークルに所属する大学生５名に協力を依頼し，ビデオの撮影を行った。撮影では，教室や服装，教科書など中学生を想定して準備した。また，ビデオモデリングの利点でもある，周囲の登場人物の行動や表情，話し方の抑揚にも留意して撮影を行った。モデリングに使用する教材であるので，米田（2009）を踏まえて，「簡単でわかりやすい場面と行動を選ぶ」「登場人物を少なくする」ようにし，注意がそれてしまうような不要な情報を減らすように配慮した。撮影したビデオ映像は，2011年同月に編集作業を行った。編集作業では，操作のしやすさ，分かりやすさに留意し，再生環境が整っていると考えられる DVD に出力を行った。各映像の長さは，シナリオによって異なるが，７秒から57秒である。

３．指導ガイドブックの作成

SST では，一般的に，教示，モデリング，リハーサル，フィードバック，般化という流れを通して行動を指導していく。そこで，一連の技法を，ビデオ映像を用いながら使用できる指導ガイドブックがあれば，指導の参考になり，一定の指導効果が得られるのではないかと考えた。相川・佐藤（2006），井澤ら（2008）

等を参考に作成した，指導の基本的な流れは次の通りである。

（1）インストラクション（言語的教示）：これからどんなソーシャルスキルを学ぶのか，そのスキルを身に付けることがなぜ大切なのか，教員が生徒に話して聞かせたり，生徒と話し合う。中学生は動機づけが難しい年齢と言われているので，この過程が重要である。ここで，ソーシャルスキルへの意識付けや身近なものとして考えるきっかけを与えるようにした。

（2）モデリング：生徒にビデオ映像によるモデルを観察させてスキルを学習させようとする技法である。モデルとなる良い例を観察するだけでなく，悪い例のどこが悪いか，どのような結果を得られるか，周囲の反応はどうだったかなどノンバーバルな部分も観察させる。そして，事実に関する単純な質問や，自分に置き換えた場合どうするかなどについても考えさせる。

（3）リハーサル（ロールプレイ）：ロールプレイなどで，実際の行動を繰り返す。はじめにビデオ映像と同様な場面でロールプレイを行い，モデルを参考にしやすい状況にする。そして，生徒にとって身近で具体的な場面を設定する。多様な場面を設定し，色々な相手と異なる展開で行うと，より日常場面にスムーズに移行させることができると考えられる。

（4）フィードバック：生徒が実行したスキルの出来栄えについて，どこが良かったか，どうすればもっと良くなるか，といった情報を与える。教員が与える場合もあれば，生徒同士で伝え合う場合もある。褒めるような言葉がけや，より適切にソーシャルスキルを使用できるように促す言葉がけを例示した。

（5）般化（定着化）：学習したスキルが日常場面で実行されるように促す。学んだスキルがどんな場面で使えるか考えさせたり，話し合ったり，日常場面でスキルを実行する課題を与える。また，学校のあらゆる場面でフィードバックを行うことも効果的である。ここでは，ワークシートを用いて，自分の行動や結果を記述するようにする。

全ての段階を通して，指導者が使用しやすくするために，具体的な言葉がけを用いて提示するようにした。また，ソーシャルスキルを「知識の側面」「言語的側面」「非言語的側面」（相川・佐藤，2006）の視点から指導することに留意した。「知識の側面」とは，ある場面で目標を達成するためにはどのように振る舞えばよいのか，またはどのように発言すればよいのかといったことを生徒が知っているかどうか，「言語的側面」は，ある場面で実際にどのような内容の話をしているか，言葉づかいは適切か，話の組み立て方は説得的かなど，また，「非言語的側面」は，アイコンタクトや声の大きさや表情，相手との距離のとり方などである。これらの視点に基づいて指導することで，ソーシャルスキルのより良い理解を目指した。作成した指導ガイドブックは，A４版38ページとなった（Table 2）。

Table２　ガイドブック学習活動例

22. 悔しさや怒りを言葉で伝えること	
シナリオ	DVD「メインメニュー」→「アサーション」→「22a」:【悪い例】 数学の授業で，個人のプリントを終えた時間を測っていた。他の生徒よりも遅れてしまっていた生徒（藤井）は途中で投げだしてしまった。 DVD「メインメニュー」→「アサーション」→「22b」:【良い例】 数学の授業で，個人のプリントを終えた時間を測っていた。生徒（藤井）は，他の生徒よりも遅れてしまっていたが，投げ出さずに取り組んだ。
①	身近な話題からスキルに関する質問をする ・どうしても何かできなかったり，負けてしまったとき，どんな気持ちになるかな？ ・何かできなかったり，負けてしまったときは，悔しくて何かすることはある？ ・何か達成することや勝つことも大切だけど， できないときや負けたときに，悔しい気持ちを上手く表現することも大切なんだよ。
②	▸▸DVD の【悪い例】を観て．．． ・このシーンのどこが良くないと思う？ ・先生は，男子生徒（藤井）に対して，どんな反応をしていたかな？ ・自分が男子生徒（藤井）だったらどうするかな？ ▸▸DVD の【良い例】を観て．．． ・このシーンはどうかな？ ・男子生徒（藤井）は，どうしたいと言っていたかな？ ✍ポイントをまとめる ・悔しくても，物を壊したり，誰かを傷つけてはいけない。 ・どんな気持ちか，どうして悔しいのかを，言葉で表現しよう。
③	同様な場面でロールプレイを行う ・DVD では気持ちを口に出して，悔しさを表現していたね。 異なる場面でロールプレイを行う ・こんなときはどうする？一緒に考えてみよう。（生徒に身近な状況）
④	そのリハーサルに対してフィードバックを与える ・どうして悔しいか，具体的に言葉にできていたね。 ・深呼吸や好きなことをしたりする方法もあるよね。 ・友達同士でお互いに評価しあってみよう。
⑤	改めてスキルに関する質問をする ・何かできなかったり，負けたりして悔しいときは，どうすれば良いかな？ ・学校の生活場面でどんなときに使えるかな？ 宿題でスキルを実行する ・この授業以外で，悔しさを言葉で伝えることをしてみよう。 ・「いつ，どこで，誰に実行し，結果はどうだったか」をワークシートに書いてこよう。

Ⅲ．結　果

１．試行を依頼した教員の報告

公立中学校通級指導教室の担当教員１名に，本研究で作成したビデオ教材の試行を依頼し，数名の生徒に個別に実施したところ，次のような報告が得られた。

・生徒のビデオ教材に対する関心は高く，集中してビデオ映像を観ることができていた。
・指導を受けた生徒は，いくつかの場面で，なぜこの場面が悪いのか上手く説明できない様子も見られ，彼らの生活場面での困難さが映し出される課題もあった。
・適切な行動やソーシャルスキルについて，生徒が考

えるきっかけとして有効である。
・指導ガイドブックには，表情や場の雰囲気などの視点もあり，非言語的側面に注目させることができる。
・DVDのメニュー画面などは操作がしやすく，通常の学級の生徒や教員でも使用できる可能性がある。
・市販のビデオ教材と比較して，扱われるスキルが多く，指導ガイドブックを参考にしながら，生徒に応じた指導の変更もしやすいと考えられる。

一方，ビデオ映像の編集に関して，各スキルのタイトルが画面に表示されると，生徒がそのタイトルに注目してしまい，課題が容易になるという指摘などもあった。また，アンケート調査の協力校にビデオ教材を送付した際に，教材を実際に使用して気づいた点を知らせてもらうように依頼した。寄せられた回答には，指導に役立ったという感想と共に，今後の教材作成の参考になる，改善すべき点についての記述もいくつか見られていた。

２．他のビデオ教材との比較

今回作成したビデオ教材と指導ガイドブックについて，市販のSSTビデオ教材A，若松・坂口（2012），若松(2009)で作成したビデオ教材との比較を行った。

（１）市販のビデオ教材A：実際の発達段階に対応した登場人物が出演し，ソーシャルスキルの良い例と悪い例が明らかになるように撮影・編集されている。また，それぞれのソーシャルスキルについて，スキルを適切に行うポイントがビデオ教材内で解説されており，視覚的に理解しやすい。一方，このビデオ教材は，ソーシャルスキルの困難を抱えている人だけでなく，指導者，保護者の障害理解にも使用できるため，スキルを適切に使うポイントや質問，スキルに関する解説の難易度の設定が不明瞭である。
（２）若松・坂口（2011）のビデオ教材：この教材は間接発話理解を扱っており，それぞれのシナリオで，その後どう行動するかを生徒に予想させるビデオ教材である。正答が分からない時のために，より分かりやすいと考えられるヒント映像が３段階準備されている。しかしながら，モデルとなるようなビデオ映像がなく，どのように指導を行うかは指導者に委ねられている。また，ヒント映像の難易度の検証が行われておらず，日常場面であまり遭遇しない場面もいくつかある。
（３）若松（2009）のビデオ教材：この教材も，発達障害のある生徒が適切な言動をしない場合とする場合の２場面がペアになっており，計14のスキルを扱っている。本研究と同様，演劇部所属の大学生がモデルを演じており，演技も歯切れよく，スキルのポイントも分かりやすいものである。その一方で，１人の発達障害の生徒にとって必要であると考えられるスキルを選んでおり，汎用性に課題がある。

このように，今後改良すべき点はあるものの，本研究で作成したビデオ教材は，アンケート調査を行い，中学校で必要性が高いと考えられるスキルを選んでいること，指導の参考になるガイドブックが付属していることなどから，従来の教材と比べて，中学校等の現場で使いやすいものであると考えられる。

Ⅳ．考　察

１．本教材の利点について

生徒がビデオに集中していた，適切な行動やスキルについて考える機会となる，非言語的側面に注目した指導ができる等の教員の報告や，他のビデオ教材との比較から，本研究で作成したビデオ教材は，先述したビデオモデリングの利点を活かすことができるものになっていることが示唆される。また，このビデオ教材で扱われるソーシャルスキルは26あり，指導ガイドブックを参考にして，個々の生徒に合わせた指導の変更もしやすいことから，より生徒の必要性に応じた指導ができると考えられる。さらに，メニュー画面などの操作がしやすく，通常学級の生徒や教員も使用できるかも知れないという意見からは，ソーシャルスキルに困難を抱えている生徒だけではなく，周囲の生徒たちも，この教材を使って学習することで，彼ら自身のソーシャルスキルが向上したり，発達障害等の生徒への対応が上手になったりする可能性も推測される。

これらのことから，教員にとって使い方や指導方法などが分かりやすいため，学校等での実用性・汎用性が高く，指導の有効性が期待されるビデオ教材が作成されたと言える。

２．今後の課題

本研究で作成したビデオ教材に関して，解決すべき課題が４つ挙げられる。１つ目は，スキルの選択についてである。本研究では，教員が必要と考えるスキルを選択したため，セルフコントロール，課題遂行，アサーションなどが多く，仲間関係やマナーのスキルが少なくなった。しかしながら，思春期の友達関係は心の成長にとって非常に重要であり（明橋，2007），対人関係を良好にすることにつながる，仲間関係やマナーのスキルも不可欠のものである。今後の研究では，

今回選択されなかった項目を基に教材化する，実際に生徒が身に付けたいと感じているスキルを調べるなどの方策が検討される必要がある。

２つ目に，本研究では，通級指導教室の担当教員1名に，シナリオについての意見は聞いたものの，作成したビデオ映像が，アンケートに回答した教員が想定した場面やスキルを本当に表しているのかどうかの検証を行っていない。実際に，ビデオ教材を使ってみたアンケート協力者から，いくつかの映像には，登場人物の位置などにより問題点が分かりにくいものがあるという指摘もあった。現場の教員と密接な連携を取りながら進めていくことで，よりよい教材の作成が可能になると考えられる。

３つ目は，指導ガイドブックに関してである。ガイドブックに，ロールプレイの参考になる身近な場面を例示したり，スキルごとにワークシートを作成したりすれば，さらなる指導の助けとなったであろう。また，ソーシャルスキルの変化をアセスメントできる観点があると，より有用なものになることが推測される。

４つ目は，作成に時間がかかったため，SST の実施までに至らず，ビデオ教材と指導ガイドブックを用いた指導の効果の検証ができなかったことである。これからも実践的な研究を続け，その結果を基に，ビデオ教材や指導ガイドブックの改善を行っていくことが今後の課題である。

【謝辞】

本論文は，第一著者の指導の下，第二著者の坂口明正が執筆した2011年度広島大学特別支援教育特別専攻科特別支援教育コーディネーターコース修了論文の一部に加筆修正したものである。研究に多大な御協力を頂きました，広島市立段原中学校通級指導教室担当の大本市郎教諭をはじめ，多くの方々に厚く御礼申し上げます。

【参考文献】

相川充（2010）対人関係スキル教育の限界と可能性－人間関係をどこまでスキルとして学ばせることができるのか．児童心理，**64**（15），29-36.

相川充・佐藤正二編（2006）実践！ソーシャルスキル教育．図書文化社.

明橋大二（2007）10代からの子育てハッピーアドバイス．１万年堂出版.

Bellini, S. & Akullian, J. (2007) *A meta-analysis of video modeling and video self-modeling interventions for children and adolescents with autism spectrum disorders*. Exceptional Children, **73**(3), 264-287.

Charlop, M. H., & Milstein, J. P. (1989) *Teaching autistic children conversational speech using video modeling*. Journal of Applied Behavior Analysis, **22**, 275-285.

Charlop-Christy, M. H., Le, L., & Freeman, K. A. (2000) *A comparison of video modeling with in vivo modeling for teaching children with autism*. Journal of Autism and Developmental Disorders, **30**(6), 537-552.

Delano, M. E. (2007) *Video modeling interventions for individuals with autism*. Remedial and Special Education, **28**(1), 35-42.

藤金倫徳（1999）ビデオモデリングによる軽度発達障害児の要求充足行動の促進－正の強化刺激獲得可能性の観点から－. 特殊教育学研究，**37**（3），53-60.

井澤信三・霜田浩信・小島道生・細川かおり・橋本創一編著（2008）ちゃんと人とつきあいたい．エンパワメント研究所.

小林正幸（1999）先生のためのやさしいソーシャルスキル教育．ほんの森出版.

是枝佳世・小谷裕実（2006）軽度発達障害児に対するソーシャルスキルトレーニングの効果－社会的コンピテンスの視点から．LD 研究，**15**（2），160-170.

ことばと発達の学習室 M（2009）ソーシャルスキルトレーニング絵カード　指導事例集. エスコアール.

益山友和・青山眞二（2011）高等養護学校におけるソーシャルスキルトレーニングの在り方について－個別学習におけるビデオモデリングとグループ学習を組み合わせた指導の試み－．北海道教育大学紀要教育科学編，**61**（2），131-144.

南　誠（2006）アスペルガー症候群の児童を対象とした会話における意図理解の評価と支援に関する事例的研究．上越教育大学　発達支援研究，**10**，10-12.

Nikopoulos, C. K., & Keenan, M. (2004) *Effects of video modelling on training and generalisation of social initiation and reciprocal play by children with autism*. European Journal of Behavior Analysis, **5**(1), 1-13.

岡田智・後藤大士・上野一彦（2005）ゲームを取り入れたソーシャルスキルの指導に関する事例研究：LD, ADHD, アスペルガー症候群の3事例の比較検討を通して．教育心理学研究，**53**（4），565-578.

上野一彦・岡田智編著(2006)特別支援教育　実践ソーシャルスキルマニュアル．明治図書.

若松昭彦（2009）コンピュータを用いた社会的スキル

学習教材の開発に関する基礎的研究．広島大学大学院教育学研究科附属特別支援教育実践センター研究紀要，第7号，pp.1-6.
若松昭彦・坂口明正（2012）高機能広汎性発達障害生徒の間接発話理解を促すビデオ教材の作成．広島大学大学院教育学研究科附属特別支援教育実践センター研究紀要，第10号，pp.1-6.
米田衆介（2009）自閉症スペクトラムの人々の就労に向けたSST．精神療法，**35**（3），34-40.